
雪の舞う城

山上 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の舞う城

【Nコード】

N8691D

【作者名】

山上 翔

【あらすじ】

なんてことのない日常。いつもどおりの仲間と過ごす平穏。ある「奇病」を抱えながらも普通の生活を送っていた。だがある日、僕の生活は一転した。

ブログ（前書き）

PDF 閲覧推奨

プロローグ

これで何回目になるだろう。数えてもいないし覚えてもいない。無機質な静寂の中で、幾度となく見てきたこの景色。

僕の視界は真紅に染まっていた。

その中に、白い影が大量に蠢いている。まるで血の海を泳ぐ魚群の様に見えた。

よく見ると、それらは人や何か動物の形を成していた。だが周囲の紅色に目が眩み、個々の様子までは判らない。しかし何故か、その数だけは正確に把握する事が出来た。

一四五七体の白い影。

そしてそれらは、行軍するかのように列を成して移動している。

右から左へと進んでいく白の大群。速度はそれほど速くなく、人の歩く程度である。

僕は、視野から外れていく影達を目で追おうとした。ところが見える範囲に変化は無かった。

眼が動かない。瞬きも出来ない。それどころか、身体があるという感覚すら無い。まるで眼球と脳髄だけが取り残されているような奇妙な感覚だ。

しかし何度も体験している内に、この感覚に対する違和感は次第に薄れていった。どうやら僕は今、定点カメラと化しているらしい。そう分析できる程に慣れていた。

そして僕は、ただ呆然と目の前の異様な光景を眺めた。影達は依然として速度を変えずに進んでいる。

しばらくして眼前を横断する列も末尾を迎えたらしく、右側から来る影は無い。そこから元の紅色に戻っている。それから最後の影が視界の左端へと消えた。

そして動く物は無くなった。視界はまた、真紅一色。

いつもなら、これで終わる筈だった。

けれど今回は違った。

どこからか男の声が聞こえた。どこか懐かしいような静かな声だった。

「終わりを……。頼んだぞ」

声が消えた瞬間、視界は真紅から暗黒へ。
僕の意識はそこで途切れた。

第一章（前書き）

PDF 閲覧推奨

登場人物

柄谷正幸（主人公）

水村結華（同級生）

高井優人（同級生）

第一章

気がつくと、僕は椅子に座っていた。周辺をざっと見回すと、夏服であるポロシャツを着用したクラスメイト達が席に着いていて、教室内独特の蒸し暑さにうだりながらも授業に意識を集中させている様子が目に映った。

目の前の机には、二時限目である化学の授業道具が置かれている。確か化学教室での実験授業を終えて、教室に戻ってきた直後にアレを見たんだ。

教室の時計を見ると、時計は三時限目開始時刻から五分ほど過ぎたところを回っていた。今は英語の授業中らしいが、開始を告げる号令の記憶は一切ない。どうやら十分間ぐらい意識を無くしていたらしい。普段通りなら数分で済むはずなのに、やけに長い。というか誰にも気づかれなかったのが驚きだ。

とりあえず化学の授業道具を鞆に仕舞い、今度は英語のそれを机の上に出す。

それから、改めて教室内を見回した。

教壇上では教科担任である若い女の教師が黒板に英文とその訳をせつせと書いていて、真面目な生徒が、まだ七月半ばだというのに喧しい蝉の鳴き声に集中力を削がれながら、負けじとシャープペンの走る音をかつかつと響かせ板書写しに精を出していた。その他の生徒は蒸し暑さにやられ無残にも机に突っ伏し呻いていた。

思わず、ふっと安堵の溜息が口から漏れる。どうやら僕の異変に気がついた者はいなかったようだ。

ふと、僕は少し汗ばんだ額に手をやった。室温の所為ではない嫌な感じの汗が指先を濡らした。

アレを見た後は、少しの間だが非常に調子が悪い。頭の芯が締め付けられるように痛むし、動悸は激しいまま治まらない。いつもと同じなら、眼も真っ赤に充血しているに違いない。今更ながらそう

思って、顔を隠すようにして机に突っ伏した。

アレとは、さっきまで見ていた……夢というか幻というか。僕は白昼夢だと認識している。白昼夢というものは辞書を引いた結果、『現実には満たされない欲求や願望を空想して現実から乖離^{かいり}してしまふ事』を言うらしい。しかし僕は欲求不満って訳じゃない。あの映像が僕の欲求や願望というなら自主的に精神科の窓口駆け込んでいる。

だからあれは実際、白昼夢じゃないのだろう。しかも現れるのは白昼だけじゃなく、夜だろうが朝だろうが何をしていようが関係ない、完全にアトラダムだ。

けれど睡眠状態でもないのに意識が現実から離れてしまう点については、まさに白昼夢としか言いようがなく、それ以外に適切な言葉が見当たらない。

しかし他人に訊かれた時には、夢とか幻と説明するのがなんとなく嫌だから貧血症だと言っている。親しい人物は例外だが。

ちなみに僕が貧血症だというのはもちろん建前だ。以前、医者に掛かった事があるが全くの健康体だそう。要するに原因不明というわけである。

それから、あの夢は何なのかと自己分析してみると正直に言っている内容にまったく心当たりが無かったりする。あんな意味不明の映像は短い生涯を振り返ってみても記憶に無い。脳内で作り上げた幻覚にしてはリアルすぎると思うが、過去に体験していたら絶対に忘れないだろう。

さらに気になるのが、今まで何度も経験してきた過去には無かった最後の声。あの言葉に対して思い当たる事はまったく無い。聞き覚えのあるような無いような声だったが一言二言だけじゃ流石に思いつけない。それに『頼んだぞ』って、一体何を頼まれたんだろうか。

……なんて事を考えても仕方ない。あれは僕の精神に巣食う病だ。七年前に起こった忌々しい事故の後遺症に過ぎない。

不意に、あの光景が脳裏に映し出される……。

暗闇の中に響く轟音。

突如として襲ってきた不可解な衝撃。

混乱に陥った人々の悲鳴。

——また頭が痛くなってきた。じわりと全身に汗が滲んでくる。

体調が良くない時に、あれこれ考えるのは止めたほうがいい。そう思った瞬間だった。

「正幸、大丈夫？」
まさゆき

囁くような声量で声を掛けられた。机に突っ伏したまま、反射的に顔だけを相手に向ける。隣席に座る結華ゆいかが心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。僕も小声で答える。

「大丈夫。……なんでもないよ」

「あのユメなの？」

あっさりと根本的な原因を言い当てたその人は、中学からの同級生。よってあの夢のことも知っている。

「ご明察。けどもう治まった。……今回はちよつと長かったけど」

「やっぱりね……。そう思って先生には適当に言い訳しておいたから」

「……そっか、助かるよ」

なるほど、道理で誰にも気付かれなかったわけだ。仮に誰かに声を掛けられても無反応だったと思うのだが、気付かれないのが一番良い。

自分では分からないが、あの夢を見ている間の僕は何をされても反応が無いらしい。意識が飛んでいるのだから当然である。だから事情を知らない人には大袈裟に対応されることが多い。毎回、見ず知らずの人に救急車を呼ばれそうになって困る。実際、呼ばれたことが何度かあった。

学校内では担任やクラスメイトにいつもの言い訳をしておいたか

ら、それなりに対応はしてくれている。しかし発症する度に保健室行きを勧められるのはやはり面倒である。

「……それで、具合はどう？」

そう訊かれて気付いたが、この些細な会話の間に頭痛はすっかり治まっていた。身体のたるさもほとんどない。相手の反応からすると、目の充血も治まったみたいだ。尾を引かずにすっぱりと治るのはいつも通り。だから、問題ないだろう。

「なんだか話していたら落ち着いたよ。サンキュー」

「……そう、よかった。……でも無理はしないでね」

そう言って結華は視線を前に戻した。少しは安心したらしい。今はもう普段の表情に戻っていた。そしてノートに板書の続きを書き写し始めた。

僕は了解、と答えながら改めて結華の横顔をじっと見つめた。

端整だが、どこかあどけない印象を受ける顔立ちをしている。頭部を飾る艶やかな髪は、肩を少し超える程度の長さで今は一つに結つてある。大きめな双眸には漆黒の煌めきを宿し、力強くも優しい眼差しを演出していた。一言でいうなら和風美人というところだろう。そういえば中学の頃からモテていたような気がする。これだけ美人なら当然というものだが。

僕の視線に気づいたらしい彼女は、少し呆れた表情を浮かべながらペンでノートをとんとんと叩き、それからペン先を黒板に向けただ。板書を写せ、という意味だろう。

僕は曖昧に笑ってから、素直に従うことにした。ファイルからルーブリーフを一枚取り出し、すでに黒板の半分を占めている板書を書き写し始めた。

授業終了を告げるチャイムが鳴り、教室内は普段の騒がしさを取り戻し始めていた。

僕は身体の緊張を解すべく大きく伸びし、それから目の前の授業道具を鞆へと仕舞う。なんとなく、最後に残った一枚のルーブリー

フを手に取り、しげしげと見直した。なかなか上手くまとめられた、などと秘かに自賛していると、すっと僕の手元からそれを抜き取られた。

「……珍しい。正幸がノート取るなんて、一体どーしたの？」

淡泊な感じだが、微妙にぼんやりとした口調で話し掛けてくる男が一名、僕の前の席に着いてルーズリーフ越しにこちらを見ていた。元々彼の席なので前に居るのは当然だ。しかし彼がこの時間に起きているとは到底思わなかった。

「……事件だ。“爆睡王子”が昼休み以外に御目覚めになるなんて……」

目の前にあるのは誰もが童顔と表現する優しそうな顔。眠そうに目を擦るその仕草で今は一層幼く見えた。中学一年の少年に間違われてもおかしくない位だ。

「それは正幸が真面目にノート取ったから、雨が降るかわりじゃないかな。折角気持ちよく寝てたのになぁ。」

と言いつつ、今度はしかめっ面で頭をがしと掻いていた。多少癖毛らしい髪は、前髪だけがおかしな方向に撥ねている。そんな寝癖すらも女子曰く「可愛い」らしい。……一体何処が可愛いんだろう。

「常時眠りっぱなしの優人（いっぴう）に、僕が毎回ノートを取っているかどうかなんて分からないだろ。それと僕のノートに目覚まし機能は付いていない」

僕は苦笑混じりに言いつつ、ルーズリーフの返還を求めて手を差し出した。

優人は全授業の大半の時間を寝て過ごしている。どのクラスにも一人は居るような眠りキャラだ。だがその優しさ満点の外見からか、独特なのんびりとした雰囲気からか、付いたアダ名が“爆睡王子”だ。外見については彼の名前である“優人”を考えると、名は体を表すとはこの事なんだろうかとも思う。ちなみに教師陣からは“眠り（たかい）の高井”として常にマーキング対象とされている。本人はそ

れをお構いなしに寝てしまうのだが。

「はいよ。……あふ、けど勉強するのはいいことだね。」

優人は欠伸を噛み殺しながら、ルーズリーフをこちらに返却してきた。

「それよりもさ。優人は少しでも授業内容把握してるのか？」

それを受け取り、仕舞いながらふと思ったことを、手で寝癖を押さえつけてる優人に訊いてみた。

「わかんないねー。いつも寝てるから」

悪びれることなく答える優人は前髪と奮戦中。それ絶対に手じゃ直らないと思うけどな。

「……はい、優人。これ使って」

すっと差し出されたのは折り畳み式の可愛らしい櫛だ。自分の席に着いていた結華が、目を細めてくすくすと笑いながら優人に櫛を渡す。どうやら優人の対前髪戦が可笑しかったらしい。

優人は受け取った櫛を寝癖部分に挿して梳こうと悪戦苦闘していたが、すぐに髪と絡まったようで、前髪に櫛がぶら下がっている。これには僕も吹き出した。

「ははっ、どんだけ強力な寝癖なんだよ。食虫植物か？」

「うるさいなー。癖っ毛だからだよ。……結華も笑いすぎだつてば

ー」

櫛を目先でぶらぶらさせてる優人が、少々拗ねた顔で抗議した。

「——あははっ。ご、ごめんね。つい可笑しくて。……でも優人って授業中ずつと寝てるのに成績悪くないよね。実は家でこつこつ勉強してるのか？」

話を変えようとして訊いたらしい結華は、視線をそらし肩を震わせながらこらえ笑い中だ。

しかし、優人が家庭学習してるというのは無いと僕は思った。普段の授業態度や、いつぞやの教師から問題を解答するよう指名を受けた時に「答えたら寝てもいいですか？」となんの躊躇いも無く発言したのを思い出すと、優人が部屋で一人黙々と勉強している姿は

想像し難い。

それに僕は、前から優人の性格を知っている。優人も中学からの付き合いだからである。

「いんや、してないね。全く。これっぽっちも」

肩をすくめながら言う彼は、興味の無いことはとことんやらない。そんな奴だ。

「中学の時からずっとそんな感じだよ。受験勉強もしなかったの？」

ようやく平時に戻った結華が、どこか懐かしげに訊いた。僕と同様、中学生三年時代を思い出していたようだ。三人は同じクラスだったから大概の思い出は共有している筈だ。

「いやあ流石に受験勉強はしたよ。多分、中学生になって一番勉強したと思うな」

優人は櫛をぶら下げたまま、にへらつと笑いながら得意げに言った。可愛らしい櫛が妙に様になっていて笑える。これも“王子”たる所以なのだろうか。教室の隅で談笑していた女子達が「王子可愛い」と騒いでいるのが聞こえた。今度は櫛王子か？

「そういや、なんで二人はこの学校にしたのさ？　ボクは家から近くて学力もそこそだったからなんだけど。正幸はともかく結華はもつといい学校に行けたのに。……誰かこの前髪を何とかしてくれないかな」

どうやら僕はこんな櫛男に同格あるいは格下と思われるらしい。事実、悔しいことに僕と優人の成績に大差は無い。ちなみに僕の成績は学年平均でいうと中の上くらいだと思う。そこに何故か優人もいる。まったく世の中は不公平だ。当然そんな奴の髪は梳かしてやらない。

「私は高校でもフルートをやりたかったの。この界隈の高校で音楽クラスがあるのはここだけだったし、吹奏楽部の実力もあるところだから。それに家も近かったし。……ん、ここ押さえててね」

優人の前髪を慣れた手付きで丁寧に梳かしつつ、結華はしっかり

とした理由を述べた。確かに結華は中学の頃からフルートの奏者で吹奏楽部に所属していた。僕自身は結華の演奏を聴いたことが無いのだが、コンクールでも何度か賞を受賞していて“水村^{みずむら}さんはフルートが上手”と校内でも評判だった記憶がある。それで音楽的に実力のあるこの学校を選ぶというのは納得の理由である。僕はというと、優人とほとんど同じ理由だ。これが類は友を呼ぶという奴なのか。

「だから来年は二人とクラスメイトにはなれないのよね。」

結華は、直ったよと優人の前髪から手を引き、櫛をポケットに仕舞いながらどこか名残惜しげに言った。

「ありがとー。やっぱ結華が同じクラスに居ないのは嫌だなあ」

優人も、真っ直ぐになった前髪を撫でながら器用に眉を吊り下げ残念そうな表情だ。

確かに仲のいい友達とクラスが別になると確定しているのは寂しい。

二年に進級すると同時に類型を選択しなければならず、一クラスしかない特別類型の英文型・理数型・芸術音楽型を選択した生徒はそれぞれの類型クラスで纏まる事になる。普通クラスである文理型を選ぶ予定の僕や、音楽とは無縁な優人が結華と一緒にのクラスになることは無い。

そして優人はどうするんだろうか。そういえば今まで訊いたことが無かった。

「ボクは考え中かな。その時の自分に合った類型にしようと思ってるよ。まだ一年の七月だし、夏休み前でいまいちやる気が出ないしさ。」

……実際、何も考えてないみたいだ。この先もこんな感じでいいのだろうか、と僕の方が心配したくなる返答である。

「いやー、しかし今日も頑張ったなあ。なんだか清々しいね」

仕舞いには晴ればれとした顔で意味の分からないことまで言い出した。あの様子で優人が何かを頑張っていたなら他の連中など既に

過労死していても不思議ではない。

「一体何を頑張ったって言うんだ？ 他の真面目にやってる人が聞いたら呆れる台詞だな」

結華も苦笑と疑問が七対三ぐらいで混ざった顔をしている。要するにちよつと呆れ顔だ。

「ふふん。僕は常日頃から戦っているのさ。そう！ 突如としてやつてくる奴らとね！」

と、優人は胸を反らして豪語した。これを聞いて優人が何を言わんとしているかは大方の予想がついた。結華も苦笑と納得が八対二ぐらいで混ざった顔をしている。要するに呆れ顔だ。

「……はあ。どうせ『睡魔達にはどうやっても勝てないんだよ』とか言つつもりなんだろう？」

「そうなんだよねー。奴らは夜討ち朝駆けを得意とし、いつもボクの死角から攻めてくるんだよ。それでもボクは頑張って戦ってるんだけどね」

先を読まれた事など微塵も気にせずに優人は腕を組んで、うんうんと一人頷いている。

「……いや、優人の場合は白昼堂々だろう。あと『戦ってるんだけど』ってことは連戦連敗なのかよ」

などと突っ込んでみても優人は「ま、そういうことー」といつも通りあっけらかんと惚けるだけだった。そんな僕らのやり取りを見て、結華がくすくすと微笑むのもすっかりお決まりだ。

——不意に天井のスピーカーからチャイムが鳴り響いた。

「あ、優人。次は現代文だから、寝たら駄目よ？ 寝たらまた立たされちゃうから」

教科書やノートを出し、授業の準備をしつつ結華が注意を促す。果たしてこの気遣いが優人に届くだろうか。

「うん、大丈夫だよ。立ってても寝れるからさ」

否、届くどころかあさつての方向へと解釈されたようだ。

やれやれと首を横に振り、視線を前へ戻すと、既に現代文の教科

担任である禿頭とくとうの男性教師が壇上に立っていた。そうして間もなく、日直の号令で授業が開始された。

再び静寂に包まれた教室内に、教師の朗読だけが淡々と響いている。僕はそれをぼんやりと聞きながら、唐突にこれが僕の日常なんだなと心の中で再認識していた。

第一章（後書き）

いかがでしたでしょうか？
よろしければ、是非感想をお聞かせ願いたくあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691d/>

雪の舞う城

2011年1月22日02時48分発行